

ラならんか緑樹の林所在に連れり。これも傳作儀の事業なりと大園氏は語れり。眼前に見ゆる塔ながら、大野原の距離は大海のそれにも似て意外に遠く、五十分を費して初めて着くを得たり。道路を外れし畑の中に巍然として聳え立つ八角七級の磚塔の、尊きまでに美はしきかな。俄に吹き荒べる北風に、息もつきあへぬまでに吹き捲くられながら、吸ひつけらるゝ如く上下左右と見まはす。塞外に多く認めらるゝものと等しく磚を積み重ねて成れる塔にして、各層三間許りの高さを目測せらる。一・二兩層の各面には兩側に美事に菩薩をあらはし、隅角には龍柱をしつらへたり。三層以上は像なく、支柱も六角に作りて三邊のみ浮き出でたり。二・四・六各層は四面の中央を空開し、一・三・五・七には、これに應ずる所に扇を閉させる窓形のみを設け、その他の面には各層櫃子窓の形を作り、中央の三格上半のみを空にせり。初層の下を三段に突き出でたる蓮瓣に受け、その下の段には牡丹を刻み、更に雷紋くづしの段と肘木の組物の段とを重ね、その下を石がけにて受けたり。三層以上の有様は風と沙塵とに妨げられて仔細には見別け難けれど、各層の角と上下とを飾れる組物の優れて美はしきに目を惹かる。更に委しくは専家村田教授の發表に俟つべし。塔の頂邊の屋根破れて危げなり。下部東面に當り、近く拙劣なる修補の認めらるゝは口惜しけれど、このまゝ風雨の侵害に曝し置かむことは更にも悲し。初層南面には隸體にて萬部華嚴經塔と刻みたるが、正南前方數歩に當り重修萬部華嚴塔記（民國十□年十一月）の一碑を建てたり。東面の修補はこの時に施せるならんか。塔の中には書き残されたる文字もあるべしとて、蒙古兵を促し、登攀して搜索せしめたれど、何物も認めずとて降り來りぬ。この塔は遼代豊州城内に在りたるものなるべきこと、前記和田氏の論述中に見えたる如くなれば附近に故城趾の名残もやと見廻せど、たゞ一面の畑のみにて、それかと思はるゝものなし。風愈々強く、包